広報ただみ診療所

障害があるとかないとか

朝日診療所　医師　森（もり）　冬人（ふゆと）

私は目が悪いです。眼鏡をかけて生活しています。さて、みなさんは私の事を「障害者」だと思うでしょうか？たぶん障害はないと思う人が多いでしょう。けれども、私は眼鏡がないと車も運転できません。ろくに仕事もできないでしょう。人と会っても顔が見えなくて、店先の看板も理解できなくて外出が嫌になるかもしれません。もしも「眼鏡なしで視力が良くないと運転免許停止だ」という制度なら生活に困ってしまいます。

私の目が悪くても普通に生活できる理由は、眼鏡を持っている他にもあります。眼鏡が壊れても数千円ですぐに新しい眼鏡が買えます。予備の眼鏡もちゃんと用意しています。眼鏡をつけていれば運転免許も取得できる制度になっています。なにより世の中の人々が「眼鏡をかけている人がいるのは当たり前」と自然に理解してくれます。

認知症の人、足が悪い人など、病気を持つ人・障害者と言われる人が、目の悪い私のように日頃から障害を苦にせず生活できれば良いですが、まだ難しい点もあるでしょう。良い認知症の薬があるとか、高性能の車椅子があるとか、そういう事だけでは解決できないのです。もちろん「ドラえもん」のような有能なロボットが付きっきりで支援できる時代になれば解決するかもしれませんが、きっと１００年先の話でしょう。

認知症の人・障害がある人を支える制度やサービスがしっかりしている事、公共機関や商店がバリアフリーになっている事、書類や説明が目・耳が不自由でも高齢者でも理解しやすい事、そういうことも大事です。しかし、それだけではなくて、広く多くの人が、眼鏡の人が普通に隣にいるように、認知症の人も障害がある人も、隣にいることが当たり前だと理解できるかどうかが大切でしょう。私は認知症の家族と同居したことはないのですが、患者さん・ご家族・介護の職員から教えてもらい、認知症の人と共に暮らすことはどういうことなのか、大変な事も、幸せな事も少しだけ理解できるようになりました。様々な病気・障害を持った人が理解されて暮らしやすくなるにはどうすればいいのか、私も考え中です。

地域おこし協力隊として Vol.93

只見町教育振興協力隊　丹羽（にわ）　貴一（たかかず）

私は、只見高校魅力化コーディネーターとして日々高校生と接しています。しかし大学生となると只見町でめったに接する機会がありません。高校生にとって、そして小中学生にとっても、自分の将来やってみたいことや夢、目標を育む上で、普段接することのない様々な大人に接する場は大切です。そんな機会のひとつが、教育委員会がひらいているサマースクール。今年も福島大学の学生さんに依頼し、小中学生向けの学習支援を行ってもらいました。大学生たちは本当に真剣かつ朗らかに指導にあたってくれました。参加した子どもにとって充実した楽しい時間だったのはもちろんですが、スクールの後の時間も、もっと上手く教えられたのではないか、明日はこうやって改善しよう、と熱く議論する大学生たちに、運営側の私たちも大きな刺激を受けました。また８月後半から１ヶ月間、心志塾でも東京大学の学生さんがインターンで活躍してくれています。奥会津学習センターで寮生たちと生活し、心志塾や高校で生徒の活動に参加したり学習支援をしたりする中で、高校生にとっていい刺激が生まれています。

こうした場がイベントとしてあることはとてもいいことなのですが、できれば今後、大学生がもっと継続的に只見町に関わる機会を増やしたいと考えています。只見町のような中山間地域で生の教育現場を体験することは、実は大学生にとっても貴重な機会です。只見町の子どもたちが良い刺激を受ける場が増えるように、参加した大学生が何度も遊びに来たり、参加者から後輩に関わりが受け継がれていく、という流れを仕組みとしてつくっていきたいです。